

假名遣便法序

著者曾つて職を札幌農學校に奉ぜし時、先覺故永田方正氏、國語漢文の學科を擔當し、常に假名遣の教授法に苦心し、徒らに記憶にのみ訴ふることの効果少きを歎じ、一日著者に對つて其意見を問はれ、之に答へて語源を原ねて國語の聯絡を保つ一法を示したるに、氏案を拍つて喜び、直ちに其法を應用して、滿足の結果を收め、更に字音假名遣を教ふるに當り、説を爲して曰く、余は幼少の頃より詩を學び、多年の經驗に由りて、某某の韻は某某の假名なるを、一々熟知し居れど、今の韻を知らざる者に對しては、此法用ゐる難く、又語源探究の法は漢字に對しては施すべき術無く、字音の假名は、本居翁の假字用格に従ひて、唯暗記する外道無かるべしと。著者當時支那音の變遷を研究し、聊か知る所ありて、漢字轉音轉韻の理の、假名遣に應用すべきを示したるに、永田氏

驚歎し、直ちに筆紙を携へ來りて卑見を敲き、隨つて語れば隨つて記し、忽ち數十枚の稿を作るに至り、且つ曰く、此妙案余の獨占すべきものに非ず、宜しく世に公開して、衆人の困苦を救ふべしとて、其出版を勧誘せられ、因つて自ら筆を執りて稿を起し、之を東京の知人に託せしに、不幸にして神田の大火に遭ひて其稿を失ひ、更に改訂を施し、新稿を作りて印刷に附し、明治二十五年五月始めて小冊の形にて世に出だし、名づけて**字音假名遣便法**と唱へ、次いで又**國語假名遣新法**を著はせり。

兩書幸にして世間の需要に應じ、忽ち廣く使用せらるゝに至りたるは、著者の僅少なる勞力の、貢獻する所多かりしを謝す。然れども其販賣は總べて書肆に一任し、其印刷の何版に至りしか、其結果を詳かにせざりしに、其書肆倒れて兩書既に絶版の姿と爲るに至れり。後の假名遣を説く者、拙案に由る者多く、其法の

廣く使用せらるゝに隨ひて、却つて立案者の何人なるかを顧みる者少なく、甚だしきに至りては、往々著者に對つて其法を辯じ、著者は之を謹聽することの止むを得ざる場合を生ずる笑柄を作れることあり。是れ或は別家の繁榮に伴ひて、本家の忘却せらるゝ類なるべし。

棒引法の行はるゝに至りてより、著者の念頭亦假名遣の考案を留めず。その復舊せるとせざるとは、關する所なく、共に興味を喚び起さずして、原稿の外は、舊著の一部も手許に残さざるに至りしも、敢て意に介せず、冷然として打ち過ぎ來りしが、近來假名の使用法益々亂雜に赴き、之を矯正せんと試むる人の、屢々來りて説話を求めらるゝあり。假名遣の書世に多しと雖も、著者の意見に合する者至つて少く、さればとて講義を作りて筆記を促すは、其勞徒らに多し。故に舊著國語假名遣新法と、字音假名遣

便法とを参照して、大に其内容を改め、全く形を變じたる新本一卷と爲して、國語字音の兩編を收め、**假名遣便法**と名づけて、世に公にし、文壇に筆を執り、敎壇に子弟を導き、或は他の方面に於いて、**假名遣**に苦しむ人の參考の用に供して、其一助と爲さんとす。

大正二年九月

著者 大島正健識

例言

一、本編は専ら語源と轉音とを正し、同系語の關係を結び、聯想を起して記憶を助けしむることを以て主眼とす。

一、音便假名遣を説くに當り、音聲轉化の理を示すは甚だ有益なりといへども、事音聲學に屬し、本編の能く盡し得べき所に非ず。此書を用ゐる者、此點につき尙深く研究を要す。

一、語源を説くに當り、諸家の解釋と意見の異なる所多きは、或は獨斷に見ゆる所あるべしといへども、其は學理を研究して假名遣の眞價を定めんとする微衷に外ならず。

一、本編に載せたる言は、多く舊來の書に由るといへども、なるべく古言を省き、實用多き言を選びて、之を録せり。古言の假名を知らんとせば、適當の辭書に由るを宜しとす。

一、假名遣の説明を助くるが爲め、五十音を列記し、其下に羅馬字を附して、音韻の關係を示す。

五十音表

阿行	あ	a	い	い	う	u	え	e	お	o
加行	か	ka	き	ki	く	ku	け	ke	こ	ko
佐行	さ	sa	し	si	す	su	せ	se	そ	so
多行	た	ta	ち	ti	つ	tu	て	te	と	to
奈行	な	na	に	ni	ぬ	nu	ね	ne	の	no
波行	は	ha	ひ	hi	ふ	hu	へ	he	ほ	ho
麻行	ま	ma	み	mi	む	mu	め	me	も	mo
也行	や	ya	い	yi	ゆ	yu	え	ye	よ	yo

阿段

以段

宇段

衣段

於段

羅行 り ら り り る る れ れ ろ ろ

和行 め わ ゐ ゐ ゐ う ゐ ゐ ゐ を っ

あい ろ え お の五字を母音或は韻と言ひ、他の四十五字を子音と呼ぶ。母音と結びて子音を生ずる者を父音と唱ふ。父音は之を字にて表はし難し。羅馬字にて示す所の *k s t* の類是なり。子音の下に附したる羅馬字は、假名の順序に従ふ理論上の記法なり。實際の發音に従へば、しは *sh*、ちは *ch*、つは *tsu*、ふは *fu* に近し、又也行の *vi, ye*、和行の *mi* は用ゐることなく、い え ろ は阿行の *i, e, u* のみなり。

目次

國語假名の區別

音便假名遣	三
加行音便	三
波行音便	四
麻行音便	六
奈行音便	七
羅行音便	八
和行音便	八
佐行音便	八
長聲音便	九
清音假名遣	九
わ は	一〇
ゐ い ひ	一四

うゆふ

.....一七

ゑえへ

.....一九

をふほ

.....二四

濁音假名遣

.....三三

ぢづとしず

.....三三

假名遣便法 第一編 國語之部

假名遣便法

大島正健著

第一編 國語の部

國語假名の區別

國語假名遣に音便、清音、濁音の三類あり。

音便とは言の原音の轉じて別音となり、其假名には、原音の方を用ゐずして、轉音の方を用ゐるを言ふ、例へばさきたま(埼玉)をさいたまといひ、かみべ(神戸)をかうべといふが如し。

言の音を引延ばして呼ぶを、長聲音便と唱ふ。

清音にては阿行、和行、波行の三類の假名常に相混ぜることあり。

和行の假名は昔は皆うの父音(u)にてう(u)あ(wa)う(u)い(i)う(u)う(u)う(u)え(e)う(u)お(o)と響きたれど、今は諸國大方はゐゑをの三字う音を失ひて、いゑおと混ずるに至れり、但しううはうに同じと知るべし。

波行の假名は昔は皆唇音にて、今も尙九州、山陰、北陸、奥羽の諸國に於いて其迹を留むるが如く、ふ(f)あ(a)ふ(f)い(i)ふう(f)ふ(f)え(e)ふ(f)お(o)と響きたるべしといへども、後他の諸國に於いてはふの一字の外は喉音の類と爲り、更に又言の中或は下にありては、阿行若しくは和行の假名と混ずるに至れり。

濁音にては、佐行のじ(z)と、多行のぢ(j)と相混ずることあり、但し四國、九州の人には、其音の區別明かにして、此假名遣の必要を感じざる者多し。

音便假名遣

加行音便

加行の父音〔ㄱ〕は舌の後部と軟腭と相接し暫く息の流出の道を塞ぎて、而して後發する音なり。此音、言の中或は下にありては、舌根を上ぐるに至らずして脱落ち、母音のみ響くに至ることあり。いとろの弱母音に伴ふとき最も然りとす。かゝる場合に於いては、其母音の假名を用ゐるを法とす。

一、きよりいに轉ず。

さきはひ	幸	さいはひ	たきまつ	松明	たいまつ
つきたち	朔立	ついたち	つきたて	衝立	ついたて
はきずみ	掃墨	はいずみ	やきば	刃	やいば
やきと	灸	やいと	わきだめ	辨	わいだめ

さきなむ 呵責 さいなむ つきばむ 啄 ついばむ

おきて 於而 おいて かきて 書而 かいて

よき 善 よい とほき 遠 とほい

二、くよりろに轉ず。

かくし 格子 かりし さくし 冊子 さろし

ひやくし 柏子 ひやりし ほくでう 北條 ほろでう

わらぐつ 藁沓 わらろづ やうやく 漸 やうやう

よく 善 よう はやく 早 はやり

波行音便

波行の父音ㄱは、兩唇の間より、軽く息を吹きて發する音なり。

古はばひへほも、今のふの如く唇音なりし證あり。英語の f は

下唇と上齒とを用ゐる半唇音なれば、其實は合唇音なる我が波

行の父音に對する、適當の符號に非ざれど、假りに之を當てたる

なり。この合唇音は、同じく合唇音なる、和行の父音(ㄱ)に近づき、母音を同化してㄹ音に轉ぜしむるに至る。之を波行音便と名づく。

一、ばよりㄹに轉ず。

かはたけ 皮茸

からたけ

かはの

河野

からの

かはほり 蝙蝠

からほり

はばき

箒羽掃

はろき

ふきがば 韃吹革

ふいがろ

二、ひよりㄹに轉ず。

いもひと 妹

いもろと

おとひと

弟

おとろと

しひと 舅

しろと

をひと

夫

をろと

せひと 兄

せろと

かりひと

獵人

かりろど

いひて 言而

いろて

とひて

問而

とろて

相撲向は名詞となるときは、すまひ、むかひと書き、其音便をすまろ、むかろと爲

すべきを、常にすまふむかふと書くは、俗用に從ふものにして、例外なれば、正格の法と見倣すべからず。

三、ふよりうに轉ず。

ほふし

法師

ほうし

さふらふ

候

さうらふ

四、へよりうに轉ず。

つかへまつる

事

つかうまつる

五、ほよりうに轉ず。

ほほ

頬

ほう

ほほづき

酸醬

ほうづき

なほし

直衣

なうし

麻行音便

麻行の父音(ㄷ)は、鼻に通ひて發する合唇音にして、是も亦言の中或は下にありては、和行の父音(ㄹ)に近づき、母音を同化してう音に轉ぜしむ。

一、まよりりに轉ず。

たまはる 賜 たらばる

二、みよりりに轉ず。

かみそ 楮紙 麻紙 かうぞ かみかき

かみつけ 上野毛上 かうつけ かみべ 笄搔髮 首上

こみち 小路 ころぢ たゝみがみ 疊紙 たるがみ

てみづ 手水 てりづ をみな 女 をうな

三、むよりりに轉ず。

おむな 媼 おりな かむし 柑子 かりじ

かむち 麴 かりぢ ひむか 日向 ひらが

あらむ 將有 あらり せむ 將爲 せり

ごらむずる 御覽 ごらうずる

奈行音便

奈行の父音ㄱは、麻行の父音ㄴに似て、鼻音なるに由りてかゝりに通ふ例あり。

こぬずる 困 ころずる

ぬ音は又いの音便となることあり。

せぬで 不爲而 せいで いはぬで 不言而 いはいで

羅行音便

羅行の父音ㄹは脱落ちて、其母音の、うに變はることあり。

とりで 取出 とうで

和行音便

和行の音は、同行の中にて互に相通ひ、うの音便となることあり。

まゐで 參出 まうで まをす 申 まうす

佐行音便

佐行の父音ㄷは、母音いに接するとき、脱落つることあり。

あした	朝	あいた	くし	串	くい
まして	況	まいて	さむし	寒	さむい

長聲音便

長聲音便にはい又うの假名を用ゐる。

しか	詩歌	しいか	ひき	蟲負	ひいき
むか	六日	むいか(むゆか)			
ふゝ	夫婦	ふうふ	によぼう	女房	によらぼう
まくる	設	まうくる	やか	八日	やうか

清音假名遣

和行、波行の兩音の、阿行の音に轉ずるは、是亦音便法なるに過ぎず。和行音は其父音(ミ)の脱落つるより、阿行音となるなり。故に之を母音の假名にて寫すも、理論上別に妨あることなし。然

れども兩者由來を異にせるが故、これが別を立つること、其本義を
探るに又便利多し。波行の父音は、近世に至り、唇音(フ)より腭
音に移り、加行の父音(ハ)の類似音と爲り來れるは、九州、山陰の一
部、北陸、奥羽の大部を除きては、諸國皆然りとす。加行には既に
音便法を許せり。因りて波行にも之を許し、其父音の脱落する
位置に、母音の假名を用ゐて差支あることなし。加行音便は平
安朝の古法なればとて尊奉し、波行音便は近世の新法なればと
て排斥すといふは、一に古書のみに拘泥して他を顧みざる、和學
者の陋見と謂ふべし。然れども是は一家の私見を以て改むべ
きに非ざれば、識者の賛同を得るまで、姑く舊法を用ゐることゝ
せり。

わ は

わは言の中、又下にあるときは、はと紛れ易し。左に少數のわの

方を擧ぐ。他ははなりと知るべし。

あわ

泡

あわただしき

惶遽

あわつる

周章

さわぐ

騷

さわやか

爽

かわく

乾

たわむ

撓

あわのわは、わく(沸)のわと關係ありて、共に擬聲語なるべし。或はこのわは輪の義にて、泡の形を示すなりといふ説あれど取らず。

沸騰の義より出でたるものなるべし。

前に同じ。

これ又風の音のさわさわなどと同じく擬聲語なるべし。

風の音などより出でたる語なるが如し。

干上がりたる物の音を示す擬聲語なるべし。

たわたわといふ形容語より出でたる動詞なるべし。或はたよる(便、たもつ)保の如く、たは語頭に於て、わは輪の義なるに、語尾のむを附して、物の力を支ふる形を示すなりとも解し得れど前

たわやか

嬋妍

よわき

弱

いわし

鰯

ひわ

鶉

しわ

皺

しわき

吝

解の方穩當なるべし。

たわの轉じてしなやかの義となりたるなり。

也行の音は軟聲なり。この軟聲のよとわと連
なるとき、たわたわなどと義通ひて力無き狀を
表はす。

弱き魚の義にて、わの假名も是に由るといふは
いかゞ、但し假名遣の記憶には便利なり。

是も弱き鳥の義なりといへど取り難し。ひわ
の名は其鳴聲にかたどりて附けたるものなる
べし。

しばむしをるなどと義通ひて、しわの言出でた
ることなるべし。しわのわは輪の義なりとい
ふは、本義に非ざるべし。

しはきと書けど、本義詳かならず。

いわけなき

稚

いはけなきとも書く、語源明かならず。

くわゐ

慈姑

葉の鏝の形に似たるより、鏝蘭の義なりといふ。

たわら

倭

されど鏝はくはの假名なれば、此義いかがにや。
たはらの假名もあれど、束葉の義なるべし。

次の假名のわはゑの轉なり。

こわね

聲音

ずわね

末枝

うわる

植

すわる

坐

熟語にて分解すれば、わ音の明かに顯はれ出でて、は音と紛ふべからざるものあり。

ことわり

理言

ことわざ

諺言

しわざ

仕業

はらわた

腸腹

のわき

暴風
分野

左の熟語の下の方なるわは輪の義なり。

うらわ

浦回

おほわ

輶

くつわ

轡

くるわ

廊

ゐ い ひ

右三類の内、少數のゐの方を出だす。他は言の上にあるときはい、中或は下にあるときはひの假名と知るべし。

ゐに不動の義あり。住居の居は落着きたる狀にて、ゐるといふ義なり。又水の溜まり集まる處を井といひ、堰といふも、共にゐの假名なり。

ゐざらひ 臀

ゐざり 膝行居

ゐしき 尻敷居

右のゐは居の義より出づ。左の敷語も亦居の義と關係あるが如し。

ゐ

猪、亥

頭のゐすわりたるより名づくといふ。

うなる

髻、髮

兒童のうなじに生ひたる髮にて、頂居の義なりと云ふ。

かたる

乞兒

傍居の義なりと云ふ。

ゐ

蘭

下に敷き又席に織りて其上に居るより出でたる語なりと云ふ。

くわる

慈姑

ゐは蘭なるべし。

あぢさゐ

紫陽花

此ゐも蘭なるべきか未だ詳かならず。

ゐなか

田舎

水の集る處即ち田の中の義なり。田居中の上略などと言ふは當らず。

ゐもり

蛸

井守又堰守にて溜り水の中に住むを以て名とす。

ゐや

禮

敬ふのうやの轉なり。

あゐ

藍

ゐの義未だ明かならず。

くれなる

紅

吳の藍の義なり。

なる

地震

語源詳かならず。

ゐる

率以

連れ伴ふ義なり。

もちゐる

用

まゐる

参

持ち以るの熟語なり。此語波行上二段もちひ、もちふの假名遣も専ら世に行はる。但しもちうもちゆの用法は破格なり。
まゐるの本義未だ明かならざる所なりと雖も此は率るのゐと關係あるが如し。

熟語の下の方に屬する左の假名のゐは居の義なり。

いへる

家居

かもゐ

鴨居

くもゐ

雲居

くらゐ

位居

とりゐ

鳥居

もとゐ

基居

しきゐ

敷居

まとゐ

圓居

言の中或は下に、いゝの假名を有てるもの無きに非ざれども、多くは轉音の假名なり。

はいたか(はやたか)

鵲

はいと(はやひと)

隼人

さいづち(さづち)

柊揆小槌

きとしのいに變はるは、音便の處にて説けり。也行上二段の動詞にいの假名あるものは、次に示すべし。

う ゆ ふ

此三字、言の上にあるときは紛ふ憂なし。動詞の下にあるときの外は他に混することなく、音便のうの用法を除きては、他は皆ふの假名と心得べし。

左に動詞の下の假名うゆふの區別を示す。

阿行下二段 得 え う

此外に無し。

和行下二段 飢 うゑ 植 うゑ

蹴 くゑ 据 すゑ

聶 ひゑ ひう

此外に無し。

也行上二段

老

おい

おゆ

悔

くい

くゆ

臥

こい

こゆ

凍

こい

こゆ

報

むくい

むくゆ

此外に無し。

也行下二段

癒

いえ

いゆ

肥

こえ

こゆ

絶

たえ

たゆ

生

はえ

はゆ

見

みえ

みゆ

燃

もえ

もゆ

此外其數多し。此下二段動詞には他動詞に轉ずるとき、そ

の也行音の性質を表はす者多し。いやす、こやす、たやす、は

やすの如し。和行下二段飢の自動うゝの、他動うやすとな

るが如きは特別の例外なり。他動詞に轉ぜざる類といへ

ども、ゆ音に由りて、その也、行音なるを知るは難きに非ず。

右阿行、和行の外は、皆波行の假名なりと知るべし。

也行下二段動詞と波行下二段動詞とは、語尾の假名最も混じ易し。之を分つに尙一の便法あり。其は也行下二段の方は自動詞にして、波行下二段の方は他動詞なりと心得るにあり。也行のこえ、こゆ(肥)、さえ、さゆ(洩)、つひえ、つひゆ(費)、みえ、みゆ(見)は自動詞にして、波行のあたへ、あたふ(與)、かぞへ、かぞふ(數)、さしへ、さしふ(支)、むかへ、むかふ(迎)は他動詞なるが如し。其中左の二項に注意すべし。

一、覺、超のおほえ、おほゆ、こえ、こゆは也行下二段に屬すれど、他動の如く活く、

二、膺、衰、答、堪、仕、蹇、震はいらへ、いらふ、おとろへ、おとろふ、こたへ、こたふ、たへ、たふ、つかへ、つかふ、なへ、なふ、ふるへ、ふるふは波行下二段に屬すれど自動に活く。

ゑ え へ

右三類の中、少數のゑえの方をいだす。言の中又は下にありては、他は皆への假名と知るべし。一音言及び言の上にある者は、次の類の外はえの假名なり。阿行のゑと也行のえと、今は混用なるが故假名遣の別を立てず。

餌

語源詳かならず。

ゑた

穢多

漢字は音に當てたるなり。其本義は屠者即ち餌取にて、其轉音なりと云ふ。

ゑづく

嘔吐

餌を吐く義なり。

ゑはわる(破)のわと、義相通ふことあり。

ゑむ

罅

破れ裂くる義なり。

ゑむ

笑

破顔の義なり。

ゑふ

酔

笑むの義より轉じたるものなるべし。

ゑる

彫

ほりきざむ義にてゑの義前に同じ。

ゑぐる

剝

彫回るなり。

ゑぐき

醎

喉をゑぐる義なるべし。

ゑんじゆ

槐

古名ゑにすにて槐樹の吳音の轉なりと云ふ。
槐は吳音ゑ、樹も亦すとなること妨無しといへども、稍訝しきは中間のにの字なり。

ゑんば

蜻蛉

本義詳かならず。

次に言の中或は下にあるゑとえとの兩類を出だす。

ゑはゑと義相近く、不動體の基の義に用ゐらるゝことあり。

すゑ

据

すゑ、すうと活く下二段動詞なり。ゑはゑの轉じたる居の義なるべし。此言轉じてすゑると爲る。頭のすは別に義なきが如し。

すゑ

陶

据物の義なり。

すゑ

末

据の轉義なり。

こずゑ

梢

木末なり。

つゑ

杖

つくゑ

机

ゆゑ

故

うゑ

植

うゑ

飢

こゑ

聲

ともゑ

巴

えは裂分れたる物に對して用ゐること多し。枝も江も此假名

つく(突)の根のつと、基のゑと合して出でたる語

なるか。突き据ゑの略などといふは無理なる

べし。或は突枝にてゑはえの轉か。

杯の臺にて杯居の義なり、後今の書物などの臺

の義に轉ず。杯据の略などといふは當らず。

ゆの義明かならずといへども、ゑは基の義なる

べし。ゆは或は添言なるべし。

うゑ、うゑと活く下二段動詞なり。此ゑも基の

義なるべし。

本義定かならず。うは空の義、ゑは餌の義なる

か。

音を示す言なるべし。こはこと(言)のこと通ず。

輶繪なり。ゑは繪の字音。

を以て表はすが如し。

ふえ

笛

吹枝の義なり。

ながえ

轆

長柄にて柄は枝なり。

かもえ

鴨柄

えは柄の字なり。

さゞえ

蝶螺

小柄の義にて柄は刺をさしていふと。

きのえ

甲

えは兄の義なり。

ひえ

稗

本義詳かならず。

ぬえ

鰯

同斷

左の數言は轉音に由りて、也行のえなるを悟り得べし。

こえ

肥料

こやしともいふ。

はえ

鰯

速の義にてはやともいふ。

ひえとり

鶉鳥

ひよどりともいふ、稗鳥の義なり。

はえ

映

動詞にてはゆともなる。

もえぎ

萌黄

動詞にて萌はもゆともなる。

動詞の語尾に現はるる所のえとへの別は、ゆとふの場所にて既に説きたるが如し。

を
ね
ほ

言の上においては、をはおと紛ひ、中或は下においては、ほと混ざる恐あり。をはねに比すれば、其假名の言の數遙かに少し。故にをの方を出だして記憶せしむ。

おに大の義、をに小の義あり。小の義に用ゐたるをの言を擧ぐることに左の如し。

を

小

小川、小島のをなり。

を

麻、苧、緒

細き義に由る。

を

尾

動物の體の小なる部分なり。

をとこ

男

小つ子の轉。

をとめ

少女

小つ女の轉。

をぢ

伯父

小父の義。

をば

伯母

小母の義。

をみな

女

小みななり。おむなの老女に對していふ。

をしき

惜

小さき物の愛憐より出でたる語なり。

をしふる

教

惜しむ愛しむと義通ひて小なる者を導く義となる。

をしどり

鴛鴦

愛し鳥の義なるべし。

をさなき

幼

小を活かせし形容詞にして、なきははしたなきのなきの類なるべく、無の義と解すべからず。之を長無きなどと注するは、附會の説なるべし。

左の三言のをは麻の義より出づ。

をさ

箴

麻さしの約なり。

をけ

桶

麻笥の義より、水桶の義に轉ず。

をどし

緘

緒通しの義なり。

左の諸言のをは尾の義より出づ。

を

岑

山の裾の尾の如く延びたる處なり。山の高き處をいふは本義の轉なり。

をか

岡

をは岑、かは處にして、岑のある處なり。

をろち

大蛇

尾ある靈の義なり。

をふる

終

尾の活きたる動詞なり。

をさむる

收

終を纏むる義にて、をは尾なるべし。

をさ

長

をさむるの語尾を取りたる言なり。

みを

濬

水尾の義なり。

とを

十

數末にて止尾の義なるべし。

をは動植物の雄の義とも爲る。

をす

牡

をつと

夫

をひとの義なり。

をひ

甥

をは男にて、女の方の姪即ちめひに對して言ふなり。

をしき

雄々敷

男らしき義なり。

此をば屢々熟語の下に現はるゝことあり。

さつを

獵夫

ますらを

壯夫

みやびを

風流士

いさを

勳勇雄

左の四言のをは同義なり。

をく

招

まねく義なり。

をびく

誘

招引くなり。

をと

媒鳥

招き寄する鳥の義なり。

わざをぎ

俳優

技を以て神を招く義なり。

左の三言のをは同義なり。

をち 遠 をとつひ 一昨日 遠つ をとゝし 一昨年 遠つ

いを、うをは魚の義にて、此をは屢々熟語の下の方に現はるゝことあり。

かつを 鯉魚 しらを 白魚 ひを 氷魚

左の二言のをは同義なり。

をこ 愚 をかしき 可笑

左の類は轉音に由りて、をの假名を判じ得べし。

をめく 叫 わめくに轉じてわと相通ふ。

をのゝぐ 戰 わなゝぐと通ふ。

たをやか 嬋妍 たわやかと通ふ。

しをるゝ 萎 皺のしわと通ふ。

をる 折 曲のわより轉じて、曲ぐる義より出でたるなる

べし。

折り屈むの略なり。

枝折とも書く。

藍のあると關係あるべし。

ゐるより轉ず。

居の義なり。

をがむ

拜

しをり

栗

あを

青

をる

居

をり

檻

左の諸言に見ゆるをは、本義詳かならず。

をそ

獺

をの

斧

をぎ

荻

をす

食

をどる

踊

をごろ

驕

をゆる

痒

さを

竿

みさを

操

かをる

薰

まをす

申

やをら

徐

をさをさ

餘りに……せず

うより轉じて、をの假名となるものあり。虚言のうそををそ、兎

のうさぎををさぎといふが如し。

をとおとの兩様の假名を用ゐる言あり。

おこたる　をこたる　怠　おかす　をかす　犯

音便にて紅梅のころばいをこをばい、芭蕉のばせうをばせをと書くことあり。

左の類はふの假名なれど、をおほの假名と混るゝことあり。

あふぐ　仰　あふぐ　掘　あふひ　葵仰日

おふし　瘧　けふ　今日　きのふ　昨日

はふる　投　たふとき　尊　たふす　倒

比外尙多し。右の中、けふ、きのふのふは日の假名ひの轉、たふと
き、たふすのたは語頭にて、ふときは太き、ふすは伏すなり。他動
詞たふすに對する自動詞たふるゝのたを省きたるふるゝとい
ふ言は隠れて行はれず。

濁音假名遣

ぢづとじづとは共に其假名の言多し。其内ぢの方はじの方に比すれば其數稍少く、づの方はづの方の、凡そ二倍餘に當る。左に少數のぢとづの方を出だす。他はじとづとなりと知るべし。ぢに路の義あり、みぢ(道) ぢまた(巷)といふが如し。其濁音はぢなり。

うぢ

氏

うはうむ(産)うから(血族)のうにして、産路又生路即ち血統の義なり。

すぢ

筋

すは直、ぢは路にて、直路の義なり。

ひぢ

臂

ひがむ(僻)ひずむ(歪)ひねる(捻)のひとちと結びて曲路の義となる。

ぢに父の義ありて、其濁音はぢなり。

おぢ

祖父

おは大ぢは父にて、大父の義なり。

ぢぢ

祖父

父の父なり。

をぢ

伯父

小父の義なり。

左の數言は轉音或は略音に由りてぢの假名なるを知るべし。

かぢ

鍛冶

かぬち即ち金打の略なり。

わらぢ

草鞋

わらゝつの音便わらうづの略轉なり。

かうぢ

麴

かむだち即ち醸立の約なりといふ。

ひぢ

泥

ひづる即ち漬の義より出でたる言なるべし。

もみぢ

紅葉

もみで即ち紅出の轉なるべし。

なむぢ

汝

名持の義なりと云ふ。

くぢら

鯨

口廣の義なりといふ說あれど信じ難し、但し斯く見るも、假名遣の記憶には便なるべし。

力を要する動作に、ぢづの音を用ゐること多し。

ねぢ ねづ 振

ねぢる(振)、ねぢくる(拗)、ねぢ(螺旋)等も類語なり。

よぢ よづ 攀

よぢる(振)も同類の語なり。

とぢ とづ 閉

綴の義となるも假名同じ。

もぢる 綴

ねぢりもどらす義なり。

俗語にいぢの二字を、下の如くに用ゐることあり。

いぢける 畏縮 いぢる 弄 いぢらしき 可憐

いぢめる 逆待

左の諸言はぢの本義未だ明かならず。

あぢ 味 あぢ 鱻 あぢまめ 篇豆

あぢさゐ 紫陽花 かぢ 梶 かぢ 舵

げぢげぢ 蚰蜒 けぢめ 差別 しぢ 楊

はぢ 恥 ふぢ 藤 なめくぢ 蛞蝓

同音相重なりて、其下の假名濁音となるときは、其假名は必ず上

の清音の假名に同じ。

しゝみ

蜺

ちゝみ

縮

すゞ

鈴

すゞき

鱸

すゞめ

雀

つゞき

續

つゞみ

鼓

つゞれ

襜褕

左にずの假名ある言を舉ぐ。

ず

不

ずる

滑

俗語ずるずるより出でたる動詞。

ずるき

狡猾

同義の轉。

ずるき

芋莖

此假名詳かならず、或は髓生の義なるには非ざるか。

ずわえ

末枝

字の示すが如し、但しずはすの濁。

うず

髻華

本義詳かならず。

かず

數

量のかさに通ふ言なるが如し。かぞふといふ

きず

疵

くず

葛

ねずみ

鼠

はず

弭箒

みゝず

蚯蚓

もず

百舌

あんず

杏子

ゆず

柚子

なずらふ

準

動詞に由りて佐行の假名なるを知るべし。

きはきる即ち切にて、ずには別に義無かるべし。

大和國吉野郡國栖(くす)の産物にて、地名を之に

附したるなり。

本義詳かならず。

はしの轉なりと云ふ。

このずは鳥又蟲の名の下に附するすの濁なる

べし。

前同斷。

字音の假名。

前同斷。

古言なぞらふとも云ふ。因りて佐行の假名な

りと知るべし。

はずむ

乗勢

はは早のはと同義、ずむは助勢の語尾なるべし。

ひずむ

歪

ひは曲、ずむは前同断。

たゝずむ

佇

たゝは立、ずむは前同断。

かならず

必

假ならずの義なりと云へどいかが。

動詞の語尾のぢ又づの別を定めんとせば、多行、佐行の上下
兩二段動詞の活用を知ることとを要す。

佐行には上二段動詞無し。故にねぢ、ねづ(畏はぢ、はづ(恥)の如く
活く者は、多行の上二段動詞のみなりと知るべし。

多行下二段動詞はての假名より推して、容易くづの假名を判じ
得可し。

出

いで

いづ

奏

かなで

かなづ

撫

なで

なづ

詣

まうで

まうづ

愛

めで

めづ

佐行變格には、下に濁音を有する者あり、次の例の如し。

疎

うとんぜ

うとんじ

うとんず

輕

かろんぜ

かろんじ

かろんず

感

かんぜ

かんじ

かんず

怨

ゑんぜ

ゑんじ

ゑんず

斯くぜじずに活くに由りて、佐行なること明かなり。又多行に變格無し。故にじずとぢづと混ずる恐あることなし。

假名遣便法 第二編

字音之部

例言

一、字音假名遣とは、同音に聞こゆる、紛れ易き漢字の音に對して假名の區別を示す法なり。我に漢音吳音の二種ありて、漢音は隋唐の北音、吳音は六朝の南音を基として、傳はり來りたるものの如し。然れども漢音と言ひ、吳音と呼ぶも、既に轉訛の和音なれば、如何に精密に假名遣を正すとも、其原音と相距ること遠きは、記憶し置くべし。我方にて慣用せる字音を以て韻鏡の音と對照するに、開合清濁屢々相一致せざる者あり、又玉篇、唐韻、廣韻、集韻の反切と相叶はざる者あり、故に假名遣は原音に依らずして、從來慣用の我和音に従ひ只疑問の生ずる者あるときは、韻書を標準として、之を正すこととす。

一、彼方の反切法と我方の反切法とは同じからず、故に字音の假

名を正すに、五十音圖に由りて反切を試むるときは、往々奇怪なる結果に陷ることあるべきは免れ難し。これ我反切法の、漢字の原音に適應せざるものと知る可し。

一、我國に傳はり來りたる字音に、六朝以前の音ありて、是も吳音と呼び來りたれど、漢魏の音は南音と稱す可からざるに由り、區別を立つるがため、之を古音と唱ふべし。古音は参考のため附記することゝせり。

一、漢字の大多數は諧聲字なり。諧聲字は、字畫中の一部は義を示し、一部は聲を表はす。桐鳩空妄園悶の、木鳥穴女口心は義符にして、同九工亡袁門は聲符なるが如し。今此聲符を以て假名遣を定むる本據と爲す。此法諧聲字以外の字には施し難きこと論無し。

一、漢字の音聲の轉化は、不規則なるに似たれど、其間に自ら法則

の存ずるありて、之を應用すれば、假名遣を正す便法と爲るべし。此變化の法則を轉音轉韻の法則と云ふ。漢字の聲は音と韻とより成りて、音は我父音に當り、韻は我あ、い、う、え、お、長短の母音、若しくは之にぬ、み、む、い、う、ち、つ、ひ、ふ、き、くを添へたるものに當るなり。轉音轉韻の理は、羅馬字を以て説明を施せば、明瞭にして且つ便利なるべしと雖も、煩を避けて之を記せず。其使用は總べて讀者の活用に一任す。但し羅馬字は國語假名遣に於いて示したるが如く、假名の記法に従つて綴るを可しとす。

一、諧聲又轉音轉韻の法則を以て律すること能はざる者は、表に舉げて之を示す。説文に由りて字形を正し、且つ更に轉音轉韻の理を應用するときは、尙大に表中の字數を省略することを得べしと雖も、それがため簡に過ぎて明を失ひ、初學者の惑

を起すことなからんことを望み、殊に削らずして載置きたる者多し。表中の文字の選擇は、主として本居宣長氏の**假字用格**及び之を訂正したる白井寛蔭氏の**音韻假字用例**に據れり。

一、表中假名の位置に直線を引きたる處は、其假名に當るべき字無きを示し、又欄内に收むべき字の、明かなる他字の轉音なるときは、その一二を載せて、他は皆略したる者と知るべし。

一、漢音吳音は、文字の右側に漢音は○、吳音は●を附して區別す。

一、假名遣は既に音を知りたる文字に對して、其用法を知るを以て目的とするが故、清濁の別は、既知の事實と見做し、必要なる場合の外は之を示さず。

一、漢音若しくは吳音にて、同字に兩音ある者は、常呼の方を舉ぐるを常とす。

目次

字音假名の區別	一頁
長音三類	一
長音諸聲字規則	二
入聲字規則	五
第一類、あう、おう、あふ、おふ	九
通則	九
表	一〇
第二類、やう、みまゝ、よう、えう、えふ	一四
通則	一四
表	一〇
第三類、ゆう、いう、いふ	二三
通則	二三
表	二五

阿音と和音 二七

いとゐ 二七

表 二六

えとゑ 二九

表 二九

おとを 三

表 三

加音と果音 三

表 三

濁齒音と濁舌音 三

しとぢ 三

表 三

ずとづ 三

地名と字音 三

字音假名遣諸則用例 四

第二編 字音の部

字音假名の區別

長音三類

第一類あ、う、お、う、あ、ふ、お、ふの聲に屬する文字。

あ	う	お	あ
かう	かう	かう	かう
さう	さう	さう	さう
たう	たう	たう	たう
なう	なう	なう	なう
はう	はう	はう	はう
まう	まう	まう	まう
らう	らう	らう	らう
わう	わう	わう	わう

第二類や、う、や、う、え、う、え、ふの聲に屬する文字。

や	う	や	う
きやう	きやう	きやう	きやう
しやう	しやう	しやう	しやう
ちやう	ちやう	ちやう	ちやう
にやう	にやう	にやう	にやう
ひやう	ひやう	ひやう	ひやう
みやう	みやう	みやう	みやう
りやう	りやう	りやう	りやう

第三類、**ゆう、いう、いふ**の聲に屬する文字。

え	う
え	う
け	け
う	う
せ	せ
う	う
て	て
う	う
ふ	ふ
ね	ね
う	う
へ	へ
う	う
め	め
う	う
れ	れ
う	う

い	う	う
い	う	う
き	き	き
う	う	う
し	し	し
う	う	う
ち	ち	ち
う	う	う
に	に	に
う	う	う
り	り	り
う	う	う

長音の相混じて、其假名遣の最も紛れ易きは、右の三類なり。其假名を區別するは、頗る困難の業に似たれど、之を記憶するに種々の便法あり、左に之を示すべし。

長音諧聲字規則

一、同聲の同系字中より之に共通する所の聲符を取り、代表字と

中 夾 肩 井 寄 貳 口

ちゅう けふ せう しやう かう ちう こう ㊦

爲して、其假名を記憶すべし。さすれば他は皆之に従ふものとす、例へば

口の假名こ、うなるときは、扣、叩、后、垢等の假名はこ、う、頤の假名あ、いなるときは、罌、鸚、櫻等はあ、う、高の假名か、うなるときは、膏、豪、毫、橐等のはか、う、又が、う、井の假名し、や、うなるときは、將、牀、莊、狀等の假名はし、や、う、又じ、や、う、肖の假名せ、うなるときは、消、宵、逍等はせ、う、夾の假名け、ふなるときは、俠、莢、篋等はけ、ふ、中の假名ち、ゆうなるときは、仲、忠、衷等はち、ゆうなり。

以上の例の如く心得れば、此類の字の假名遣は、大方は誤ること無かるべし。

此規則に折々例外の者あり、其は表に載せて記憶せしむ、其例左の如し。

工にて代表する攻、紅、貢、空、鴻等はこちらなるに、江はかうなり。

江の同系字江、鉦、扛、腔、項等は、數少くして且つ用ゐることも稀なれば、其中より常用の三字江、腔、項のみを出だして表に舉ぐ。

溝と同系の溝、構、篝、購等はこちらなるに、講、耕、構はこちらなるが故表に舉ぐ。

同上の類にて音の轉じたる者あるときは、一方の字の假名を標準として、容易く他の字の假名を判ずることを得べし、其例左の如し。

易は陽、楊、揚等と共に其假名やうなれば、腸はちやう、場はぢやう、傷はしやうにして、何れもやうの聲にて、韻のあらは變ずることなし。尙は賞、裳等と共に其假名しやうなれば、當堂等は其假名たり又だうなり、是亦韻はありなり。召の假名せうなれば、迢の假名てうにして、其韻はえうなり。臭の

假名しうなれば、稊の假名きうにして其韻はいうなり。

入聲字規則

入聲は本來促音にして、我方にては其韻尾にき、く、ち、つ、ひ、ふの假名を當つるを法とす。

一、入聲字の假名に由りて同系に屬する長音字の假名を判ずる法あり、其例左の如し。

爆	ばく	暴	ばう	邈	ばく	貌	ばう
雹	はく	包	はう	卓	たく	悼	たう
較	かく	交	かう	覺	かく	攪	かう
拓	たく	宕	たう	掠	りやく	涼	りやう
讀	とく	竇	とう	族	ぞく	喉	ぞう
束	そく	湫	そう	欲	よく	容	よう

激 げき 竅 けう

溺 でき

溺 ぬく

滌 でき 條 ぢう

的 てき

釣 てう

郁 いく 有 いう

黝 りく

黧 りう

此規則に例外あり。

沃 よく 天 えう

躍 やく

曜 えう

弱 じやく 溺 でう

肅 しゆく

繡 しう

此の如き例外は幸にして其數少し、又同字に兩音ある者は其一方のみによりて長音の假名を判じ難し、例へば告にこく、かうの兩音ありて、其入聲こくのみによりて、浩、皓等の假名をこると爲すべからざるが如し。浩、皓等の假名はかうなり。

一、同上の類の音を轉じたる者にも此法を施し得べし。其例、

駁 ばく 爻 かう

翟 てき

耀 えう

檄 げき 邀 えう

軸 ちく

由 いう

是にも亦例外あれど、其は前例の如く少數なり。

二、同系字の尾音の中、撥音の方むの假名なるときは、之に對する促音の方はふの假名なりと知るべし、其例左の如し。

龜 かむ 合 がふ 念 ねむ 捻 ねふ

店 てむ 帖 てふ 厭 えむ 斃 えふ

豔 えむ 饑 えふ 針 しむ 十 じふ

同上の類にて、音を轉じ韻を轉ずる者あるも、撥音、促音の關係は、動かざるを常とす。其例、

占 せむ 貼 てふ 砭 へむ 乏 ばふ

三、ふにて終る字は、元來促音にして長音に非ず。然るに國語にて此假名を長音に讀むに至りたるに従ひ、漢字に附したる假名も、亦其法に化せられて、遂に合(がふ)、接(せふ)、立(りふ)の類を、ごう、し、よう、り、ゆうの如く引きて響かせ、他の長音の類と混ずる

に至れるなり。されば熟語に入るときは合併(がつぺい)、接待(せつたい)、立身(りつしん)の如く、促音の本性を表はすことあり。斯く長音の促音に變ずる者は總べて尾音はふの假名と心得べし。

又同字に兩様の假名ありて、其一方の尾音つなるときは、他の一方はふなりと知るべし。雜のぎつに對するぎふ、接のせつに對するせふ、執のしつに對するしふの如し。

右同系字の音を轉じ韻を轉ずることあるも、尾音のふは變はらざるを定則とす、其例左の如し。

甲	か	ふ	鳴	あ	ふ	合	が	ふ	答	た	ふ
葉	え	ふ	蝶	て	ふ	執	し	ふ	蟄	ち	ふ
立	り	ふ	泣	き	ふ	盍	か	ふ	怯	け	ふ
臘	ら	ふ	獵	れ	ふ	洽	か	ふ	給	き	ふ

合	らふ	立	りふ	夾	かふ	決	せふ
がふ	拾	しふ		及	きふ	扱	さふ

第一類、あう、おう、あふ、おふ。

通則

一、吳音にうの聲ある者は、漢音にておうの聲と爲る。

吳音く又ぐに轉ずる者は、漢音こう、又ごうなり、公、工、口、垢、侯、偶の如し。

吳音す又ずに轉ずる者は、漢音そうなり、鬆、叢、叟、藪の如し。

吳音つ又づに轉ずる者は、漢音こうなり、通、彤、鬪、豆の如し。

吳音ぬに轉ずる者は、漢音ど~~う~~なり、農の如し。

吳音ふ又ぶに轉ずる者は、漢音ほうなり、豐、奉、掇、部の如し。

吳音むに轉ずる者は、漢音ぼうなり、瞢、夢、矛、謀の如し。

吳音るに轉ずる者は、漢音ろうなり、籠、弄、婁、陋の如し。

二一般に同系字の音相通ふとき、聲符の示す所の聲は、ろとお
ろと相轉換するを常とす、左に其例を擧ぐ。

豎	寢	區	
じゆ	く	く	
豆	樓	歐	
とう	ろう	おう	
厨	爰	俞	
ちゆ	しゆ	ゆ	
鬪	投	偷	
とう	とう	とう	

加		阿	
号。敖。器。爻。肴。	尻。考。昊。杲。顥。	高。羔。臯。告。好。	か　　う
号。敖。器。公。工。	尻。考。昊。杲。顥。	高。羔。臯。告。好。	こ　　う
	合。盍。夾。甲。	始。押。壓。凹。	あ　　ふ
及。	合。盍。業。却。急。	始。邑。	お　　ふ

佐				
葬。喪。臧。壯。爽。	窻。淙。撻。倉。桑。	巢。梢。鈔。雙。双。	艘。掃。竈。造。爪。	曹。早。臬。蚤。嫂。
さう				鏗。幸。莖。
				亨。杏。羹。耕。耿。
				香。向。庚。更。行。
				康。亢。鄉。強。印。
				講。耕。構。鉅。岡。
				江。項。腔。降。巷。
				交。膠。孝。巧。樂。
窻。淙。撻。曾。走。	宗。宋。叟。雙。双。	忿。忽。叢。送。鬆。	艘。掃。竈。造。恩。	曹。早。臬。蚤。嫂。
そ				寇。後。
				口。后。勾。厚。吼。
				弘。殍。興。侯。菁。
				鉅。亘。肯。薨。肱。
				降。巷。講。構。構。
				洪。孔。江。項。腔。
申。嬰。				
颯。帀。雜。譖。卅。				さふ
颯。帀。雜。譖。卅。				そふ

波	奈		多		
は う	腦・ 囊・	な う	橙・湯・聞・嶋・到・刀・ 獐・當・撓・獠・稻・桃・ 宕・叟・吮・饗・盜・陶・ 帑・撞・蠹・討・濤・ 丁・唐・道・荷・悼・	た う	將 相 象 爭
ほ う	腦・ 農・ 能・	の う	斗・騰・冬・東・嶋・到・刀・ 投・藤・彤・董・獠・稻・桃・ 兜・等・統・桶・饗・盜・陶・ 偷・豆・撞・同・蠹・討・濤・ 讀・透・登・童・道・荷・悼・	と う	叟 奏 藪 喉 漱
は ふ	納・	な ふ		苔・ 沓・ 納・ 楊・	
ほ ふ	納・	の ふ		苔・ 沓・ 楊・	

和		羅		麻		
王 [○] 往 [○] 皇 [○] 黃 [○]	わ う	浪 [○] 牢 [○] 勞 [○] 醪 [○] 潦 [○] 老 [○] 瀧 [○]	ら う	毛 [○] 莽 [○] 孟 [○]	ま う	萌 [○] 蕤 [○] 方 [○] 亡 [○] 烹 [○] 彭 [○] 棚 [○] 邦 [○] 龐 [○] 蚌 [○] 棒 [○] 彪 [○] 冒 [○] 包 [○] 茅 [○] 卯 [○] 貌 [○] 呆 [○] 哀 [○] 寶 [○] 報 [○] 暴 [○]
弘 [○]	を う	璫 [○] 牢 [○] 勞 [○] 醪 [○] 潦 [○] 老 [○] 璫 [○] 弄 [○] 婁 [○] 陋 [○] 漏 [○]	ろ う	毛 [○] 蒙 [○]	も う	矛 [○] 牟 [○] 某 [○] 棒 [○] 彪 [○] 朋 [○] 俘 [○] 部 [○] 封 [○] 夢 [○] 邦 [○] 龐 [○] 蚌 [○] 冒 [○] 牟 [○] 豐 [○] 鳳 [○] 奉 [○] 呆 [○] 哀 [○] 寶 [○] 報 [○] 暴 [○]
	—	拉 [○] 臘 [○] 臈 [○]	ら ふ		—	法 [○] 乏 [○]
	—	拉 [○] 臘 [○] 臈 [○]	ら ふ		—	法 [○] 乏 [○] 皂 [○]

一、阿音の奥塵媪、加音の高羔臯告好尻考吳臯顯号敖囂、佐音の曹早臯蚤嫂艘掃竈造、多音の刀桃陶濤悼到稻盜討苟嶋猯饕麤道、奈音の腦、波音の呆衰寶報暴冒、麻音の毛、羅音の牢勞醪潦老の吳音をおうの聲と爲したるは古音に則りたるなり。後世の音にては漢音の如く、あうの音もありて其區別明確ならず。

一、阿音の始、加音の合盍、佐音の颯市雜譖卅、多音の荅沓、納榻、奈音の納、波音の法乏、羅音の拉臘、腦の吳音をおふの聲と爲したるは古音に則りたるなり。後世の音にては漢音の如く、あふの聲もありて其區別明確ならず。

一、加音の江項腔降巷講構構鋤、佐音の雙双窻窓縱、多音の撞、波音の邦龐蚌棒尨の吳音は、古音に則りておうの聲と爲す。近世の支那音は、北音やんぐ南音おんぐの聲なり。

一、阿音の央、加音の岡康亢郷強、印香向、佐音の倉桑葬喪臧、將相象、多音の唐湯當宕砀、波音の方亡、麻音の莽、和音の吳音は、漢音に類してあうの聲と爲したれど、古音はおうの聲なりしが如し。現時の支那南音にもおんぐの聲あり。

第一類、やら、よら、えら、えふ、いやう、いようはいを省く。

通則

一、漢音えいの聲は、吳音やりの聲に轉ず、其例左の如し。

英

えい

やう

經

けい

きやう

正

せい

しやう

丁

てい

ちやう

寧

ねい

にやう

平

へい

ひやう

明

めい

みやう

靈

れい

りやう

二、ありの聲はやりの聲に轉ず、其例左の如し。

央

あう

やう

向

かう

きやう

行

かう

ぎやう

相

さう

しやう

打

たう

ちやう

獐

だう

にやう

三、おりの聲はよりの聲に轉ず、其例左の如し。

膺

おう

よう

興

こう

きよう

甌

そう

しやう

濃

のう

ちよう

四、右の三則は同系字の轉音轉韻に適用することを得べし、其

例左の如し。

涼 聲符京はけいよりきやうに轉ず。このやうの韻を

取りて、本字涼はりやうと爲る。

狂 聲符王はわうにてあうの韻なり。あうよりやうに

移りて、本字狂はきやうと爲る。

松 聲符公はこうにておうの韻なり。おうよりやうに

移りて、本字松はしやうと爲る。

此法則を逆用して拗音のやう、よりより直音のあう、おうを
判ずることを得べし、左の例の如し。

壯 聲符月はしやうにてやうの韻なり。やうよりあう

に通ひて、本字壯はさうと爲る。

瓏 聲符龍はりやうにてようの韻なり。ようよりおう

に通ひて、本字瓏はろうと爲る。

五、あうの聲はえうの聲に通ふことあり、左の例の如し。

拗

あう

えう

校

かう

けう

抄

さう

せう

棹

たう

でう

豹

はう

へう

六、右あう、えうの轉韻を諧聲字に應用すること左の如し。

敎

聲符孝はかうにてあうの韻なり。あうよりえうに

移りて、本字敎はけうと爲る。

皎

聲符交はかうにてあうの韻なり。あうよりえうに

移りて、本字皎はけうと爲る。

聊

聲符卯はばうにてあうの韻なり。あうよりえうに

移りて、本字聊はれうと爲る。

鴉

聲符号はかうにてあうの韻なり。あうよりえうに

移りて、本字鴉はえうと爲る。

逆用

桃

聲符兆はてうにてえうの韻なり。えうよりあうに

移りて、本字桃はなうと爲る。

撓

聲符堯はげうにてえうの韻なり。えうよりあうに

移りて、本字撓はなうと爲る。

梢

聲符肖はせうにてえうの韻なり。えうよりあうに

移りて、本字梢はさうと爲る。

膠

聲符寥はれうにてえうの韻なり。えうよりあうに

此規則は右音には適用せず。
移りて、本字膠はかうと爲る。

此類は右に挙げたる主要なる例の外は、平常用ゐる者少く

れば、之を記憶し置くときは、他は前に出だせるあう、やう轉

韻の者と混ざる憂無しと知るべし。

七、あう又えうにいろの通ひて同系字を作る者あり、左の例の

す。其例、

充　じゆう　　統　とう　　終　しゆう　　冬　とう

八、吳音にてゝ又ゝの延音ある者は、漢音にてよゝの聲と爲るを定則とす。

供　く　　きよう　　從　じゆう　　しよう

重　ぢゆう　　ちよう　　龍　りゆう　　りよう

加		也阿	
香。薑。向。姜。狂。强。亨。郷。杏。印。	きやう	央。陽。羊。	やう
興。共。矜。凶。兢。恐。凝。孽。顚。	きよう	甬。雍。勇。邕。膺。庸。孕。容。蠅。用。	よう
巧。爻。樂。肴。喬。交。堯。膠。叫。孝。	けう	曜。拗。夭。搖。要。杳。	えう
業。夾。甲。叶。協。劫。	けふ	曄。押。壓。凹。葉。靨。	えふ

奈		多		佐		
娘●	にやう	娘● 長腸丈鬘祖●	ちやう	襄省● 薺匠詳相象● 商傷餉上將● 牀床章昌尙●	しやう	竟●
仍●	によう	澄● 重冢寵穠徵●	ちよう	乘繩仍● 勝稱證丞承● 春悚茸亢升● 衝鐘誦松從●	しよう	
尿溺饒●	ねう	糶條● 鳥吊釣肇刁● 兆朝迢凋趙●	てう	擾● 笑蕭椒燒饒● 肖小少召焦●	せう	梟竅●
捻●	ねふ	蝶帖疊輒聶●	てふ	熒葉● 妾浹捷攝涉●	せふ	

波		麻		羅	
ひやう	兵平	みやう	明名	りやう	良梁涼兩亮 量靈領
ひよう	氷馮	みよう	儻	りよう	龍凌
へう	包豹票表庶 森苗眇廟	めう	妙	れう	僚寥聊了料
—		—		れふ	獵

一、也音の陽羊、佐音の牀床章昌尙商傷餉上、多音の長腸丈鬯昶、奈音の娘、羅音の良梁涼兩亮量の古音は、よの聲なりしが如し、現時の支那南音にはよんぐの聲あり。一、幼牖の本音はいうなり。之を本邦の常呼の如くよの聲に讀むときは、いうと

えうとの轉韻なれば、えうの中に入ること適當なるべし。

一、嬢は娘と同義なればぢやう、釀も亦ぢやうなれど、他の攘壤讓等は、襄の音に従ひて、じやうの假名と爲すべし。

第三類、ゆゝ、いゝ、いふ、いゆうはいを省く。

通則

一、漢音にいろいろの聲ある者は、吳音にてゝの聲と爲るを定則とす。尤右有の漢いろ吳ゝ、九久求の漢きゝ吳く、流留の漢りゝ吳るなるが如し。

又漢音いろいろの聲の、吳音ゆの聲に轉ずる者あり。由遊猶の漢いろ吳ゆ、守酒受就の漢しろ吳しゆ、又じゆ、晝丑儔紂の漢ちゝ吳ちゆ、又ぢゆと爲るが如し。

あゝ、えゝに通ふ者は、漢音のいろなり。

二、漢音にゆゝの聲ある者は、吳音にてゆの聲と爲るを定則と

す、左の例の如し。

融 ゆう

ゆ

終

しゆう

しゆ

中

ちゆう

ちゆ

隆

りゆう

りゆ

弓宮等の漢音きゆうの、吳音くに轉ずるが如きは、殊に拗音のきゆうを嫌ひたるにて、例外なりと心得べし。

おろに通ふ者は、漢音のゆうなり。

三、ゆうの聲をゆうの聲に延ばして用ゐることあり、左の例の如し。

裕 ゆ

ゆう

主

しゆ

しゆう

誅 ちゆ

ちゆう

住

ぢゆ

ぢゆう

重 ぢゆ

ぢゆう

龍

りゆ

りゆう

從 じゆ

じゆう

右の中、吳音のゆう又ゆうは、漢音のよりに通ふ。

第一項のゆに轉ずるいうと、第二項第三項のゆに轉ずるゆうと、いう、ゆうの兩聲相混ざる恐あるときは、ゆうの方は、いうの方に比すれば、字數少ければ、ゆう、しゆう、ちゆうの類を記憶し置き、他はいう、しう、ちうの類なりと知りて、大方は誤ることなかるべし。

佐	加		也阿	
しゆう	宮。弓。		裕。雄。熊。融。彤。用。勇。邕。	
しう	九。久。韭。丘。休。朽。糲。糶。糾。麋。臼。求。牛。		幽。由。酉。悠。遊。誘。憂。尤。郵。有。右。友。又。	
しふ	及。急。泣。給。		邑。揖。煜。	

羅		奈		多		
隆。龍。	りゆう	乳。	にゅう	鑄。柱。住。中。衷。蟲。重。誅。厨。鋤。	ちゅう	主。趨。終。螽。衆。充。嵩。戎。從。
流。留。劉。	りう	柔。	にう	晝。肘。丑。抽。儔。惆。糅。	ちう	囚。讐。袖。壽。愛。就。柔。蒐。酒。皺。繡。首。咒。獸。修。收。手。臭。秀。守。醜。周。秋。州。聚。酋。舟。羞。
立。	りふ	入。	にふ	蟄。	ちふ	十。拾。入。執。濕。緝。襲。集。習。澁。

阿音と和音

阿音のあいうえおと、和音のわゐうゑをと、漢字の原音には、儼然たる區別ありたれど、我方現時の音にては、うは無差別にて、いゐ、えゑ、おを、互に相混じ、僅かにあとわとのみ、其別を保つに至れり。このあわの別にて、同系統に屬する字音の假名を判ずる便法あり、庵のあむより推して、奄のえむなるを知り、腕のわぬより推して、宛のゑぬなるを察し得るが如し。左に阿音と和音との代表字を擧げ、記憶の便を圖りて、字數の少き和音の方にのみ、轉音轉韻の規則を示す。

いとゐ

一、ういの聲を以て終る者は、其下の假名にゐを用ゐるを法とす、水、追、類の假名のずゐ、つゐ、るゐなるが如し。遺言の遺、唯

我の唯は、何れもゆるにて、轉じてはゐと爲る。

一、同系字にわい又わの聲ある者はゐと爲る。淮はわいなれば、唯惟等の佳の聲符ある者はゐ、又隈はわい、潰はくわい、倭はわ、果はくわなれば、畏遺委彙は皆ゐなるが如し。同理に由り賄のくわい又わいなるに従ひて、洧鮪はゐとなる。

一、本字又同系字にうつの音ある者はゐに轉ずることあり。

尉繚子をうつれうしと讀み、蔚山をうるさんと呼ぶうるとうつとは轉音、故に尉はゐなり。颺はうつなり、故に胃はゐなり。釋名に胃は圍なりとあり、故に韋の類も亦ゐなりと知るべし。

い

意。醫。矣。怡。頤。以。已。異。伊。夷。
懿。移。易。倚。肄。彘。衣。
吳音は一様ならず

ゐ

爲。唯。韋。委。位。悲。洧。遺。胃。尉。
畏。威。彙。
吳音は一様ならず

いぬ	因 [○] 寅 [○] 湮 [○] 印 [○] 引 [○] 胤 [○] 殷 [○] 隱 [○]
いむ	音 [○] 淫 [○] 陰 [○] 飲 [○]
いつ	乙 [○] 一 [○] 壹 [○] 逸 [○] 佚 [○] 侑 [○] 溢 [○]
いく	郁 [○] 澳 [○] 育 [○] 昱 [○] 粥 [○]
いき	—

えとゑ

一、漢音あいは吳音え、漢音わいは吳音ゑに轉ず。

ゐぬ	允 [○] 勻 [○] 尹 [○] 員 [○] 院 [○] はゐぬなり 員院の本音
ゐつ	聿 [○] 裔 [○]
ゐく	—
ゐき	域 [○] 洫 [○]

え	衣 [○] 哀 [○] 愛 [○] 埃 [○] 娃 [○]
えい	翳 [○] 曳 [○] 泄 [○] 裔 [○] 銳 [○] 睿 [○] 英 [○] 影 [○] 嬰 [○] 郢 [○] 盈 [○] 羸 [○] 映 [○] 營 [○] 瑩 [○] 穎 [○]

ゑ	惠 [○] 慧 [○] 晝 [○] 隈 [○] 穢 [○] 會 [○] 回 [○] 壞 [○]
ゑい	衛 [○] 桂 [○] 榮 [○] 榮 [○] 瑩 [○] 永 [○]

一、同系字にわぬの聲ある者は、ゑぬの聲に轉ずるを常とす。
 碗はわぬなり、故に宛はゑぬなり。是より宛に従ふ苑怨鴛
 等は皆ゑぬなりと知るべし。又緩のくわぬなるより、爰媛
 援媛等のゑぬなるを悟り得べし。媛は猿に作る、是より袁
 の類の遠園轅等も亦ゑぬなりと心得べし。同様に桓のく
 わぬなるより推して、垣のゑぬなるを察すべし。員のゑぬ
 なるときは、圓はゑぬなるべきこと自然なるべし。

えぬ	焉。堰。煙。咽。燕。宴。延。演。衍。羨。
えむ	沿。緣。捐。鳶。兗。奄。厭。炎。檐。鹽。豔。艷。閻。
えつ	謁。噎。咽。閱。焮。

ゑぬ	宛。冤。袁。爰。垣。娟。媛。淵。圓。
ゑつ	越。粵。曰。臧。𪛗。

えきに對するゑきは無し。故にえきの類は表に擧げず。
 おとを

お	おぬ	おく	おつ
於意	恩殷隱	億屋	乙
を	をぬ	をく	をつ
烏乎汚惡	溫穩袁怨	—	膾越

惡の音あくのをと爲り、隱の音いぬに對して、穩の音をぬと爲るが如きは轉音法則の例外なりとす。

加音と果音

加音と果音と相混同する地方多し。左に兩類を相對せしめ、表に擧げて其別を示す。

か	可箇佳介加家霞賈夏下。
が	我駕牙
かい	佳介皆解蓋戒開海久改
がい	厓害皚亥
かぬ	寒干乾漢姦間看侃諫譚
かむ	甘敢咸監函勘陷龔含

くわ	戈禍果禾火化寡瓜華
ぐわ	臥瓦
くわい	乖懷會畫怪快灰回槐
ぐわい	悔憤
くわぬ	官歡冠寬桓完緩款貫
	關還鰥患卷

かう	がく	かく	がつ	かつ	がぬ
前出	額愕學	各革核鶴覺	聒	葛割黠憂脩	顔眼岸鴈

くわう	ぐわく	くわく	ぐわつ	くわつ	ぐわぬ
光皇黃荒宏轟	瓊	郭霍蠖畫	月	活滑豁	元願丸

濁齒音と濁舌音

一、濁音の假名は、其清音に由りて辨へ得べきことあり、自、壽、食

の清音じ、しう、しよくより其濁音じ、じゆ、じき、治、途、直の清音ち、と、ちよくより其濁音ぢ、づ、ぢきを判じ得べきが如し。

二、此法則は又同系字の中に適用することを得べし、川のせぬ、尊のそぬより馴、遼のじゆぬ、昔のせきより鵲のじやく、叔のしゆくより寂のじやく、笛のてきより軸のぢく、竹のちくより竺のぢく、泥のていより尼のぢ、昵のぢつを知り得べきが如し。されど原音既に舌齒兩音の相通ひたる例あるが故、右の法則は廣く一般には適用し難し。屯、遁のとぬに對する純、盾のじゆぬ、溺のてきに對する弱のじやく、它のねに對する蛇のじやは反對の例と爲るべし。

じとぢ

じ

茲寺自事字似次氏示ぢ

辭二而兒耳爾余

尼治地持賦除

じく	じゆつ	じつ	じゆぬ	じむ	じぬ	じよ	じゆ	じや
孰肉	述術秫戍恤	日實	隼 旬巡順遵醇盾純尊閏	尋壬甚	盡迅腎刃仁人	徐舒序叙如汝助	壽樹需豎受就咒戍	蛇若邪麝閣
ちく	ちゆつ	ちつ	ちゆぬ	ちむ	ちぬ	ちよ	ちゆ	ちや
竺軸屨	朮恍	曙昵	酖	沈朕賃	塵陣診	女除絮杼	儔住	—

じゆく	塾粥	ぢゆく	—
じやく	弱雀鵲寂若	ぢやく	著擲
じよく	辱	ぢよく	濁耨

一女は男女の義なればぢよなれど、爾の義なればじよなり。

一絮は粗綿の義なればぢよなれど、調の義なればじよなり。

一杼は機杼の義なればぢよなれど、栗子又水槽の義なればじよなり。

一朮は秩の義なればぢゆつなれど、稷の一種もちあはの義なればじゆつなり。

ずとづ

本来支那音に精確なるずの音あることなし。我方にて儒者從者をずさと唱ふるが如きは、明かにじゆしや、じゆうしやの拗音を、直音に變へたる轉なり。唯叢溲賓の類の吳音を、ずと爲す例

あれど、是亦和音なるのみ。づは途豆形の如くと、とろの轉なり。
 ずゐは瑞隨蕊等其數多けれど、づゐは張鍾馨等にて、其數至つて
 少く、大方はずゐのみなりと見倣して差支なかるべし。

地名と字音

心覺となるべき記標を作りて、物を諳んずるときは、大に記憶の
 便を助くることあり。左に本邦及び支那の地名に當てたる漢
 字を記して、其假名遣を示す。

相 模

サガミ

相

サウ

餘 綾

ヨロギ

綾

(リ)ロウヨウ

久 良

クラギ

良

(ラ)リウヤウ

愛宕 美囊 香美 養父 安房 諏方 兒湯 能登 美濃 牟婁 高山 造杲 雜太

オタギ ミナギ カガミ ヤブ アハ スハ コタ ノト ミノ ムロ カグヤマ サウカ サハダ

愛宕 美囊 香 養 房 方 湯 能登 濃 婁 高 杲 雜

タウ ナウ カウ ヤウ ハウ ハウ タウ トノウ ノウ ロウ カウ カウ サフ

員 越 甲 給 始 揖 邑 法 逆 答 合
辨 後 黎 羅 宿 知 美 嗟 志 志

カ ハ シ
タ フ シ
サ フ サ
ハ フ ミ
オ ホ チ
イ フ ス ク
ア ヒ ラ
キ ヒ レ
カ ヒ
エ チ ゴ
キ ナ ベ

員 越 甲 給 始 揖 邑 法 逆 答 合

カ フ
タ フ
サ フ
ハ フ
オ フ
イ フ
ア フ
キ フ
カ フ
エ ツ
井 ヌ

長沙 武昌 楊子江 牛莊 奉天 威海衛 蒙古 黃河 上海 廣東 呂宋

チヤングシャ
ウーチャング
ヤングツーキヤング
ニユウチヤング
フオングテン
ウエイハイウエイ
モングゴル
フワングホー
シヤングハイ
クリングトン
ルソング

長昌 楊江 莊 奉 威衛 蒙 黃 上 廣東 宋

チャウ
シヤウ
ヤウ
（キヤウ）
シヤウ
ホウ
エキ
エイ
モウ
クラウ
シヤウ
クワウ
ソウ

字音假名遣諸則用例

左に初學者の便を圖り、問答を設けて、諸則の用例を示し、其運用に熟達せしむ。

一、問 應答の假名如何ん。

答 應 表によりおう。又此字古書におの假名に用ゐたる

例あるを參照すべし。

答 聲符合は合戰合併のとき促音となるが故かふなり。

本字は音を變へ、合の聲に従ひて、なふなり。

二、問 公益の假名如何ん。

答 公 吳音くに轉ずるが故漢音こうなり。

益 吳音やく漢音えき。

三、問 巧妙の假名如何ん。

巧 工は義符𠂔は聲符なること明かなり。同聲符を有

する朽にきうの音あり、きうはかうに通ひて、本字巧はかうと爲る。

妙 聲符少はせう、故に本字は轉じてめう。

四、問 豪宕の假名如何ん。

答 豪 高に従ふ者はかうなり、故に豪はがうなり。

宕 愛宕のたごなるが故たうなり。

五、問 鴛鴦の假名如何ん。

答 鴛 腕はわぬなり、故に宛に従ふ者はゑぬなり。

鴦 央は表あう、本字之に従ふ。

六、問 怨靈の假名如何ん。

答 怨 漢音ゑぬは吳音をぬ

靈 漢音れいは吳音りやう。

七、問

正直の假名如何ん。

答

正 漢音せいは吳音しやう。

直 漢清音のちよくは吳濁音のぢき。

八、問

音韻の假名如何ん。

答

音 暗はあむなるが故音はいむなり。

韻 音は義符、員は聲符なること明かなり。員は表るぬ

にして本字之に従ふ。

九、問

追悼の假名如何ん。

答

追 ろいの聲はゐにてつゐなり。

悼 卓はなくにして、本字はたうなり。

十、問

上院の假名如何ん。

答

上 上海のしやんぐにしてじやうなり。

院 完はくわぬなり。わぬの轉音はゐぬにして、本字は

之に従ふ。

十二問 俸給の假名如何ん。

答 俸 奉は吳音ぶにして漢音ほうなり。 本字は之に従ふ。

給 合の轉音にてきふなり。

十三問 老翁の假名如何ん。

答 老 老子をらうつらと呼ぶに従ひてらうなり。

翁 公は吳音く漢音こうなるに従ひて、本字はおうなり。

十四問 執拗の假名如何ん。

答 執 しつの音あり、故にしふなり。

拗 么に従へばえうなり。 えうはあうに轉ず、本字の漢

音是なり。

十五問 蒸溜の假名如何ん。

答 蒸 丞は表じようにして、本字は之に従ふ。

溜 吳音る漢音りう。

五、問

暴動の假名如何ん。

答

暴 爆のばくなるに由りてばう。

動 ろんどんを龍動と記することあり、之に従ひてどろと爲す。

六、問

恩寵の假名如何ん。

答

恩 因はいぬなるが故本字はおぬなり。

寵 前項の如く龍はろうに通ふに由りりよりの音なり。
本字は音を轉じてちようとなる。

七、問

校長教頭の假名如何ん。

答

校 較のかくなるより、交のかうなるを知る。本字は同音なり。

長 長沙のちやんぐなるよりちやう。

教 季のかうはけうに轉ず。本字は同音。

頭 吳音づ漢音と。

大問 王侯相將の假名如何ん。

答 王 王仁の名わになり、故にわう。

侯 吳音く漢音こう。

相 相模のさがみなるより、相のさうなるを知る。さう

は轉じてしやうと爲る。

將 月に從ひてしやう。

大問 訴訟を起して法庭に證據を爭ふ、訟法證の假名を問ふ。

答 訟 公はこう、故に本字はしやう。

法 法度の如く促音と爲る、故にはふ。

證 登は能登の、とにしてさうなり。登は音を轉じて本

字はしやう。

三、問

憲法第一章第一條。大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。章條皇統治の假名如何ん。

答

章 表しやう。

條 滌はでき、故に本字はてう。

皇 王はわう、本字は同音。

統 充はじゆう、故に本字はとう。

治 清音ち、故に濁音ぢ。

大正二年十月廿三日印刷

大正二年十月廿七日發行

假名遣便法奥付

定價金二十五錢

著者 大島 正 健

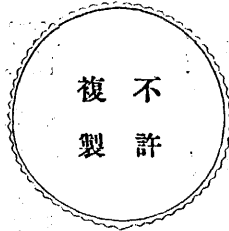
印刷者 兼發行 株式會社 啓成社

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地

代表者

遠藤國次郎

印刷所 弘文堂



發行所

東京市日本橋區本銀町三丁目二番地今川橋際

株式會社 啓成社

電話本局二一〇〇發 振替東京一二〇五五

大島正健先生最近著書

改訂韻鏡

全一冊

定價五十錢
郵稅六錢

韻鏡音韻考

全一冊

定價五十錢
郵稅六錢

翻切要略

全一冊

定價三十錢
郵稅四錢

漢字聲符考

全一冊

定價四十錢
郵稅四錢

發行所 株式會社 啓成社 電話本局二一〇〇番
振替東京二一〇五番